



Osaka Gakuin University Repository

Title	『総合的な学習の時間』の地域学習におけるアイデンティティ形成 Identity Formation in Regional Study of 『The Period for Integrated Studies』
Author(s)	木村 正徳 (Masanori Kimura)
Citation	大阪学院大学 人文自然論叢 (THE BULLETIN OF THE CULTURAL AND NATURAL SCIENCES IN OSAKA GAKUIN UNIVERSITY), 81-82 : 1-11
Issue Date	2021.03.31
Resource Type	Article/ 論説
Resource Version	
URL	
Right	
Additional Information	

『総合的な学習の時間』の地域学習における アイデンティティ形成

木村正徳

Identity Formation in Regional Study of 『The Period for Integrated Studies』

Masanori Kimura

1 はじめに

総合的な学習の時間は、これからの教育の在り方として「ゆとりの中で『生きる力』をはぐくむ」との方向性を示した平成8年7月の中央教育審議会「21世紀を展望した我が国の教育の在り方について」(第一次答申)において創設が提言されるとともに、「一定のまとまった時間(総合的な学習の時間)を設けて横断的・総合的な指導を行うこと」として提言され、平成10年の学習指導要領の改訂において創設されたものである¹⁾。

その後、何度かの改訂をへて今日に至っている。

総合的な学習の時間は、他の教科と違って教科書が無く、指導者(学級担任)自身が内容を考え、題材を決め、指導案を作成しなければならず、今までに経験したことのないものであった。それだけに学習内容は多岐にわたり、当該児童生徒にあった学習内容を選定し、児童生徒の実態に合った学習活動を行うには教師一人一人の創意工夫が問われた。

その中で、それまで社会科で行われていた地域学習を、総合的な学習の時間の中でも行い、より自由に、より幅広く地域についての学習が行われるようになった。

平成10年改訂の学習指導要領 第1章総則の中で総合的な学習の時間の取扱いとして、小学校では「各学校においては、ねらいを踏まえ、例えば国際理解、情報、環境、福祉・健康などの横断的・総合的な課題、児童の興味・関心に基づく課題、地域や学校の特色に応じた課題などについて、学校の実態に応じた学習活動を行うものとする。²⁾」と述べられ、中学校でも同様に「各学校においては、ねらいを踏まえ、例えば国際理解、情報、環境、福祉・健康などの横断的・総合的な課題、生徒の興味・関心に基づく課題、地域や学

校の特色に応じた課題などについて、学校の実態に応じた学習活動を行うものとする。³⁾と述べられている。このように、総合的な学習の時間で取扱う学習活動として、国際理解や情報、環境、福祉や健康と共に、地域や学校の特色に応じた課題もあげられ、地域学習について述べられている。

平成20年改訂の学習指導要領では第5章総合的な学習の時間の、指導計画の作成と内容の取扱いで、小学校は「学習活動については、学校の実情に応じて、例えば国際理解、情報、環境、福祉・健康などの横断的・総合的な課題についての学習活動、児童の興味関心に基づく課題についての学習活動、地域の人々の暮らし、伝統と文化などの地域や学校の特色に応じた課題についての学習活動などを行うこと。⁴⁾」となり、中学校は「学習活動については、学校の実情に応じて、例えば国際理解、情報、環境、福祉・健康などの横断的・総合的な課題についての学習活動、生徒の興味関心に基づく課題についての学習活動、地域や学校の特色に応じた課題についての学習活動、職業や自己の将来に関する学習活動などを行う。⁵⁾」となった。平成20年の改訂では、地域学習について小学校では、「地域の人々の暮らし、伝統と文化などの地域や学校の特色に応じた課題についての学習活動などを行うこと。」と、より具体的に記されるようになった。

この様に、総合的な学習の時間では、社会科以外ではあまり行われなかった地域学習が積極的に行われるようになった。

地域学習とは、地域の歴史や伝統について調べたり、地域の産業について調べたりと、自分の学校の有る地域のことをよく知ろうということである。和歌山県教育委員会では、総合的な学習の時間に役立ててもらおうと、平成12年に「ふるさと教育副読本『わかやま DE 発見!』」を刊行した。その後改訂がなされ、「ふるさと教育副読本『わかやま発見!』」を刊行している。その、「改訂版刊行のことば」の中で、「『ふるさと和歌山』のすばらしさについて学び、郷土に対する誇りと自信をもって、これからのそれぞれの舞台で活躍して欲しいとの願いから、平成12年にふるさと教育副読本『わかやま DE 発見!』を刊行し、みなさんの学校に届けました。⁶⁾」と述べられている。

ほとんどの児童は、自分の生まれ育った地域の小学校へ入学する。この自分が生まれ育った地域がどのようなところであるのかを知り、地域の伝統や文化、産業などに触れることは、郷土愛を育むことに繋がり、自分の生まれ育った地域に対する誇りを持つことに繋がるものであり、自分の生まれ育った地域（郷土）に対する誇りと自信は、思春期・青年期の発達課題であるとされている、アイデンティティの形成⁷⁾に影響を与える重要な因子の一つであると考えるのである。

このように、本論文は、総合的な学習の時間の地域学習が与える将来のアイデンティティ形成について考察するものである。

2 総合的な学習の時間の意義について

総合的な学習の時間の地域学習におけるアイデンティティの形成について述べる前に、総合的な学習の時間の意義について考える。

学習指導要領解説⁸⁾の総説1ページに、「21世紀は、新しい知識・情報・技術が政治・経済・文化のあらゆる領域での活動の基盤として飛躍的に重要性をます、いわゆる『知識基盤社会』の時代であると言われている。このような知識基盤社会化やグローバル化は、アイデアなど知識そのものや人材をめぐる国際競争を加速させる一方で、異なる文化や文明との共存や国際協力の必要性を増大させている。このような状況において、確かな学力、豊かな心、健やかな体の調和を重視する『生きる力』を育むことがますます重要になっている。」と述べられている。これからの社会は、「知識基盤社会」の時代であり、「グローバル化」の時代でもある。異なる文化や文明との共存や国際協力の必要性が増大してくることが十分に考えられる。その様な社会に対応できる人を育てなければならない。どのような社会の中でも自己実現を図りながら生きて行ける「生きる力」の育成が重要となってくる。「生きる力」とは、「確かな学力」、「豊かな心」、「健やかな体」の調和を重視するもので、多くの学校の教育目標に掲げられている、「知・徳・体の調和」を元に育まれるものである。この「知・徳・体の調和」は学校教育においてずっと言われてきたことである。筆者は、ここで言う「生きる力」とは、「知・徳・体の調和」を目指す学校教育を通して身につける、急速に変化する社会を主体性を持って生き抜こうとする力であると考えている。

総合的な学習の時間の目標として、平成20年9月改訂の学習指導要領には、「横断的・総合的な学習や探求的な学習を通して、自ら課題を見つけ、自ら学び、自ら考え、主体的に判断し、よりよく問題を解決する資質や能力を育成するとともに、学び方やものの考え方を身に付け、問題の解決や探求的活動に主体的、創造的、共同的に取り組む態度を育て、自己の生き方を考えることができるようにする。⁹⁾」と述べられ、平成29年7月改訂の学習指導要領には、「探求的な見方・考え方を働かせ、横断的・総合的な学習を行うことを通して、よりよく課題を解決し、自己の生き方を考えていくための資質・能力を次のとおり育成することを目指す。(1)探求的な学習の過程において、課題の解決に必要な知識及び技能を身に付け、課題に関わる概念を形成し、探求的な学習のよさを理解するようにする。(2)実社会や実生活の中から問いを見いだし、自分で課題を立て、情報を集め、整理・分析して、まとめ・表現することができるようにする。(3)探求的な学習に主体的・協働的に取り組むとともに、互いのよさを生かしながら、積極的に社会に参画しようとする態度を養う。¹⁰⁾」と述べられている。平成20年9月改訂と平成29年7月改訂のこの両方に共通して書かれていることは、「横断的・総合的な学習」「探求的」「課題解決」「自己の生き方を考える(考えていく)」である。自ら探求的に、横断的に様々な方向から総

合的に学習し、そこで出てきた問題を主体的、創造的、協働的に解決し、それらを通して自己の生き方を考えることができるようにすることを目標としているのが総合的な学習の時間である。「自己の生き方を考える（考えていく）」ことについて、解説には「自己の生き方を考えていくことは、次の三つで考えることができる。一つは、人や社会、自然との関わりにおいて、自らの生活や行動について考えていくことである。社会や自然の一員として、何をすべきか、どのようにすべきかなどを考えることである。二つは、自分にとって学ぶことの意味や価値を考えていくことである。取り組んだ学習活動を通じて、自分の考えや意見を深めることであり、また、学習の有用感を味わうなどして学ぶことの意味を自覚することである。そして、これら二つを活かしながら、学んだことを現在及び将来の自己の生き方につなげて考えることが三つ目である。学習の成果から達成感や自信を持ち、自分のよさや可能性に気づき、自分の人生や将来、職業について考えていくことである。¹¹⁾」と述べられている。Erik H. Erikson（以下、エリクソン）は『幼児期と社会』のなかで、「自我同一性（アイデンティティ）の概念は、過去において準備された内的斉一性と連続性が、他人に対する自分の存在の意味－「職業」という実体的な契約に明示されているような自分の存在の意味－の斉一性と連続性に一致すると思う自信の積み重ねである。この段階における危険は社会的役割の混乱である。（中略）しかし、大抵の場合、個々の若い人たちの心を悩ましてるのは、職業に関する同一性を最終的に固めることができないということである。¹²⁾」と述べ、他人に対する自分の存在意味の一つとして「職業」を挙げ、一方、「この段階（思春期・青年期）の社会的役割の混乱として、「職業」に関する同一性を最終的に固めることができないということである。」と述べている。また、エリクソンは「青年の心は本質的に猶予期間（モラトリアム）の心理である。¹³⁾」とも述べている。自分がどのような仕事をすれば良いのか、どのような職業が自分に適しているのかが分からずに、社会の一員として果たすべき責任の猶予期間として青年期があるということである。しかしながら、いつまでも決められずに居ることは、同一性の危機（アイデンティティの拡散）でもある。社会の一員として自分の人生や将来、職業について考えることはとても重要なことなのである。総合的な学習の時間は、その学習の成果から達成感や自信を持ち、自分のよさや可能性に気づき、自分の人生や将来、職業について考えていくことを目標の一つにしている。達成感や自信は、他人に対する自分の存在意味をしっかりと認識する元となる。自分に対する自信を持つことは、人生においてとても重要なこととなるのである。この自分に対する自信を持たせる一つとして、総合的な学習の時間の地域学習が果たす役割を考えるのである。

3 総合的な学習の時間の地域学習の実際

総合的な学習の時間の地域学習の例として、小学校の実例を示し地域学習の実際から考

『総合的な学習の時間』の地域学習におけるアイデンティティ形成

えてみたい。

下図は、有田市の小学3年生の総合的な学習の年間計画案である。単元2として「みかん作りをしらべよう」とある。30時間を計画しており、単元1の20時間、単元3の20時間と比べて、最も多く時間を取っている単元である。

総合的な学習の時間 年間計画【第3学年】(70時間)(案)				
【単元1】 (20時間) 糸我の地図をつくらう				
【単元のめあて】 町たんけんをして、自分たちの住む地域の様子や人々のくらしに気づく。				
【課題の設定】 糸我の町にはどんなものがあるのだろう。	【情報の収集】 グループ別で方向を決め、町たんけんに出かける。	【整理・分析】 見つけたことを地図に書き込む。	【まとめ表現】 気づいたことを大きな白地図に表す。	【振り返り】 他のグループの白地図を見て、糸我の町の特徴に気づく。
社会科との関連				
【単元2】 (30時間) みかん作りをしらべよう				
【単元のめあて】 町たんけんをして気づいたことから、みかん作りについて調べる。				
【課題の設定】 糸我の町にみかんが何本も植えてあるのを知りたい。	【情報の収集】 摘み取りから収穫まで1年を通して作業する。 AQ遊樂場を見学する。	【整理・分析】 見学したことやインタビューしたことをカードに書いて整理する。	【まとめ表現】 調べたことを図や絵に描いてまとめる。 体験したことは「みかん日記」に書いてファイルする。	【振り返り】 発表会をし、よかったところや足りなかったところに気づく。
社会科との関連				
【単元3】 (20時間) 糸我じまんを見つけよう				
【単元のめあて】 糸我の町の中から一人一人がテーマを決めて調べる。				
【課題の設定】 糸我の町の中から見たいものや決めた紹介しよう。	【情報の収集】 地域の人と話を聞こう しりょうをつかって調べよう	【整理・分析】 見学したことやインタビューしたことの中から、自分が一番伝えたいことを選ぶ。	【まとめ表現】 新聞に整理してまとめる。	【振り返り】 お互いの新聞を鑑賞し合い、糸我の町の良さに気づく。
社会科との関連		国語科との関連		

この小学校の地域は、有田みかん発祥の地として知られ、和歌山県の大きな産業の一つであるみかん栽培発祥の地である。

有田でのみかん栽培の起源には諸説あると言われている。有田市誌¹⁴⁾によると、代々庄屋を務めた家の、第6代当主である伊藤孫右衛門が伝えたと言われていると述べられている。孫右衛門は天文12年(1543年)に生まれたとある。当時の紀伊国(和歌山)は、米麦作以外にこれという特産物もなく、木の国と言われほどの土地だけに、山ばかりで耕地が少なかった。庄屋となった孫右衛門は、我が有田の地は気候温暖で地味が肥沃であるにかかわらず、山ばかりで平地が少ないために、百姓達が貧しい暮らしをしている。しかし山々は丘陵が起伏し、草木がよく繁茂するところを見ると、これを拓いて園芸作物を栽培すれば、必ずよく育って百姓の収益を増加するであろうと考え、自家所有の山林を開墾して、見聞に任せているいろいろの果樹を植えて、その適否を研究していた。その様なときに、役職の関係でたまたま肥後(熊本県)の八代へ行くこととなり、かねてより八代にはみかんという果物があって、多額の収益を挙げていることを聞いていたので、幸いの機会にみかんの小木を持ち帰り、里に繁殖させて百姓達の幸せを図ろうと考え、上司にこのことを

相談した。上司は孫右衛門の志にいたくいたく感激したが、封建治下の当時は他藩との通商貿易は厳禁とされ、国禁を犯してみかんの苗木を他国へ持ち出すことは容易な事ではなかった。しかし、上司の協力もあり、何とか苗木二本を手に入れ帰途につくことができた。当時は、帰途まで数十日を要し、天正年中（1573-91）で戦国時代末期とはいえ、まだまだ血なまぐさい戦の絶えない諸国を通り、苦心しながら生木を持ち帰った。孫右衛門は持ち帰った苗木を自家近くの畑に植え、丹精に手入れした甲斐あって数年後に香り高い黄金の実を結んだとある¹⁵⁾。

また、先ほどの「ふるさと教育副読本『わかやま発見』」には、「永享年間（1429-1441）に小学校のある地域の峰に1本の木が自生し、これが各地に植え広げられたという説や、1574（天正2）年に伊藤孫右衛門という人が、肥後国（熊本県）の八代から移植した話は有名ですが、詳しく分かっていません。むしろ品種改良であったというほうがよいかもしれません。¹⁶⁾」と述べられている。

どちらにしても、伊藤孫右衛門をはじめ、多くの先人達の努力と苦労があって、世間に名高い「有田みかん」となって今日の有田の主要産業となったのである。現在、有田の山々は秋から冬にかけて山がみかん色に変わるほど、みかん山に覆われている。また、5月の花の咲く頃は、町中にみかんの花の香りがし、初夏の到来を感じさせてくれる。

このみかん作りのことを学ぶことは、地域の産業を学ぶだけでなく、伊藤孫右衛門をはじめ、みかん作りを守り抜き、今日の「有田みかん」を作り上げてきた、先人の努力と苦労と誇りを学ぶことになる。このことが、自分が生まれ育った地域に対する誇りと自信を培うものになるのではないかと考えるのである。

筆者は、同じ有田市でも海辺の漁師町で生まれ育った。この漁師町にも、多くの先人の努力と苦労と誇りがある。かつては「うたせ」と呼ばれる帆船で、風力で船を動かし、網を引く漁があった。それが現在では、エンジンの付いた船で底引き網漁を行ったり、しらす網漁を行ったりしている。また、魚の加工品についても様々なものがあった。よく捕



現在も残る伊藤孫右衛門頭彰碑



れたエビを利用した「えびせんべい」作りは、現在では4軒ほどになってしまったが、「有田市誌」によると昭和42年当時、22軒のえびせんべい工場があったと記されている¹⁷⁾。また、魚のすり身を使ったかまぼこや天ぷらも、えびせんべい同様地域の特産品となっている。この魚のすり身を使って薩摩揚げのような天ぷらにして売り出した



現在のすり身の天ぷら

のは、筆者の曾祖父である。明治から大正にかけての時代であったと思われるが、当時よく捕れたエソという魚をすり身にして味付けをして天ぷらにしたのである。エソは現在でも捕れ、正月の雑煮の出汁に使われるほどなので、きっと美味かったことだろうと思う。天ぷら作りは祖父母の代で辞めてしまったが、現在では水揚げ量日本一となった太刀魚などをすり身にして天ぷらにしている¹⁸⁾。筆者はこの天ぷらを見るたびに曾祖父のことを思うのである。自分の曾祖父が考え出した天ぷらが今も地域の特産品としてあることを誇りに思うのである。この事が少なくとも筆者自身の自己肯定感を高め、自分自身への自信を培うものの一つであったことは確かである。

この様に、地域学習において地域のことを知ることは、自分の生まれ育った地域への誇りと自分自身への自信を培い、将来のアイデンティティ形成において重要な役割を果たすと考えるのである。その郷土の歴史や出来事が自分に近ければ近いほど（例えば自分の先祖であったり、自分の親が伝統産業を守る仕事に携わっていたりなど）誇りを強く持つのではないだろうか。

4 アイデンティティについて

次に、アイデンティティについて、筆者が理解していることを述べる。

アイデンティティ（同一性）は、エリクソンによって、その著書『幼児期と社会』（1946-1950年）の中で述べられた概念である。エリクソンは人間の発達段階を八つに分け、アイデンティティは、その中の思春期・青年期に形成されるものであり、「それは、リビドーの変化と、生得的な資質から発達した適合性、社会的役割の中で与えられた機会などとの同一化のすべてを統合する自我の能力の積重ねられた経験である。」と述べ、「自我同一性の概念は、過去において準備された内的斉一性と連続性が、他人に対する自分の存在の意味－「職業」という実体的な契約に明示されているような自分の存在の意味－の斉一性と連続性に一致すると思う自信の積み重ねである。」と述べている¹⁹⁾。すなわち、アイデンティティは、自分自身がちゃんと存在しているんだという、自分自身の存在とそれへの

自信であり、確固たる自我の獲得に向けて大変重要なものとなるのである。鑑はこのことについて、「このプロセスは他人の影響から少しずつ離れ、自分が自分の主人公になっていくということである。これをエリクソンは『同一化』から『同一性』へのプロセスとっている。つまり、他人の考えや行動などを受け入れ、その人のように振る舞ったりして同一化し取り入れていたのに対して、『自分』で『自分』をつくっていかうとするこの動きである。」と述べている²⁰⁾。

『自分』で『自分』を作っていくと心動くとは、まさに自立に向かっていくことである。自分自身の行動については自分で決め、決めたことについては自分が責任を取る。しかし、これは大変なことである。他人の考えや行動などを受け入れ同一化していた頃とは、桁違いのエネルギーが必要となる。自分で決定し責任を取る行為は、誰かのせいにしたり言い訳したりすることができない分、苦しく孤独な行為でもある。それだけに、心理的に強くなった自分とともに、自分に対する自信も強くなっていくのである。この苦しさや孤独に耐えられない人は、決定を人任せにしたり、人の言いなりになって回避したり、決定を延ばしたりして逃げてしまう。エリクソンはこれを「社会的役割の混乱（一般的には『アイデンティティ拡散・混乱の危機』と呼ばれている。）」と述べ、「彼らは自分自身が分裂するのを防ぐために、徒党や群衆の中の英雄に一時的に同一化する。それも、自分の同一性を完全に失ってしまったかのように見えるほど、過度に同一化する。」と述べている²¹⁾。確固たる自信も無く流行に流されたり、カリスマ的な人の言動に左右されたりして、本当は自分はどうしたいのかを見失ってしまうのである。このアイデンティティの形成は、後の人生にとって大きく影響を及ぼすものである。

以上、アイデンティティについて、現在私が理解している範囲でまとめたが、次に総合的な学習の時間の地域学習との関連について述べる。

5 総合的な学習の時間の地域学習におけるアイデンティティ形成の影響について

先ほども述べたように、アイデンティティは、エリクソンが著した概念で、八つの発達段階の一つである。乳幼児期からの各発達段階を経て、思春期・青年期に形成されるとされている。このアイデンティティの形成においては、それまでの生育歴が影響するのは当然であるが、自己のルーツも大切な項目の一つであると考えるのである。鑑は「自分の生まれた場所、親を求めようとする私たちの心は、ルーツを明確にすることによって、自分のアイデンティティを確立していくとすることなのである。その意味では、ルーツ探しはアイデンティティの根であるといつてよい。(中略) アイデンティティは自己の成り立ちを知り、自己のルーツを知ることによって、自己を確認する心理と深く関わっているのである。」と述べている²²⁾。ルーツとは、自分がどこから来ているのかということである。自分の親はどこで生まれ何をしていたのか。またその親(祖父母)はどこで生まれ何をして

いたのか、さらに親の親の親（曾祖父母）はどこで生まれ何をしていたのかという、自分自身の出自を明確にすることは自己を確認する心理と深く関わっていると言うのである。

鍾はさらに、「それまで本当の生みの親と思っていたのに、中学生の頃になって、親から、実は自分たちはほんとうの親ではないといわれたり、親が違う予感があったり、周囲の人に親が違うといわれて確かめたり、親を探しはじめたりする少年・少女が少なくない。突然、自分が養子であることを教えられたりするの、大変ショックであろう。また、養子であることはいわれても、どこに生みの親がいるのか教えてもらえなかったりすると、深刻に親のことを考えて悩んだりする。『自分はいったい誰なんだろう』『自分の親は何者だろう』とどうしても確かめたい衝動にかられて、いろいろ努力をして、それが悲劇になることも少なくない。これまでの育ての親から離れてしまったり、さまざまな悩みや苦しみが生まれる。自分が自分であるというアイデンティティを求める要求は、ルーツとなる自分の生まれ、親、育ち、環境や文化、そして歴史を知る衝動を生んでいるのである。」と述べている²³⁾。

かつて、何かの理由で分かれてしまった人を捜すテレビ番組があった。幼い頃分かれてしまい、何十年かたって自分を置いて出た親と会いたいという依頼があった。自分を産んだ親に会いたいと願うのは、自分の心の奥深くに自分のルーツを確かめたいという気持ちがあったからではないだろうか。また、逆に、幼子を置いて出てきてしまった親が、死ぬまでにもう一度我が子に会いたいなどと願う人の依頼もあった。何十年もたっているから、自分を置いて出た親をきっと恨んでいるだろうから、今更会いに来てくれないだろうと言うのであるが、ほとんどの場合、子どもは会いに来てくれていた。これも、子どもの心の奥深くに自分のルーツを確かめたいという気持ちがあったからなのではないだろうか。自分が自分であるというアイデンティティを求める要求が誰しもの心の深層にあるのではないかと思うのである。

筆者は、自分の生まれ育ったところもルーツの一つになるのではないかと考えている。東京などの都会では「～県人会」などというものがある。それは、会社や大学や組織の中に設けられることが多く、同じ地方出身者で集まり親睦を深めようというものである。また、東北出身者が田舎の言葉を聞きたくて上野駅へ行ったという話も聞いたことがある。同じルーツを持つ者が集まったり、同じルーツを持つ人に出会ったりして、自分のルーツを確認し、都会の中で見失いそうになっている自分のアイデンティティをもう一度強くしようとしているのではないだろうか。

総合的な学習の時間の地域学習は、単に地域のことを学習しているのではなく、自分自身のルーツに関わることを学んでいるのである。自分自身が生まれ育った地域の歴史や文化、伝統は自分のルーツに関わってくることである。自分の出自を明確にすることとともに、自分自身が生まれ育った郷土への誇りを持つことは、自分のアイデンティティの確立に影響を与えるものなのであると考える。

6 まとめ

以上、『総合的な学習の時間』の地域学習におけるアイデンティティ形成について、筆者なりに考えていることを述べた。自分の生まれ育った地域のことを知ることはとても大事なことである。先日、飛騨高山へ行ったときのことであるが、偶然に入った喫茶店の店主から高山のことを色々教えてもらう機会があった。高山がどのように発展してきたか。金森藩の藩政から幕府の直轄地になったのはどうしてなのか。自分が子どもの頃の高山はどのような様子であったかなど、とても有意義な話であった。その話を聞いていて、筆者は、店主の高山で生まれ育った自分自身の誇りのようなものを感じたのである。ご存じのように高山市は現在では日本有数の観光地となっている。国内だけでなく、外国からの観光客も年々増加の一途をたどっている。それだけにお土産物や朝市に代表される地域の特産品を売るお店も増えてきている。ただし、それは地域の人が行っているものだけでなく、他の地域からの資本の入った商店もあり、喫茶店の前のお店は京都にある会社だということであった。しかし、その様な中で、高山で生まれ育った者として、高山のためにここで頑張っていくんだという意気込みと、何よりも高山を愛する店主の心が伝わってきた。

自分の生まれ育った地域には、必ず地域の歴史があり、先人の努力と苦勞と地域を思って来た心がある。中には伊藤孫右衛門のように地域の産業に貢献した先人もいるだろう。「ふるさと教育副読本『わかやま発見』」には、太地の捕鯨や備長炭（熊野炭）、映画にもなったエルトゥール号の遭難、防災教育の教材として有名な安政の大地震の浜口梧陵（稲むらの火）など、地域の産業や歴史など多岐に渡っている。「ふるさと和歌山」のすばらしさについて学び、郷土に対する誇りと自信をもって、これからのそれぞれの舞台で活躍して欲しいとの願いから刊行された副読本であることが十分にうかがえるものである。

グローバル化が進む中で、自分は何者なのかを確認し、アイデンティティを形成することが難しくなっていくかもしれない。日本へ来た外国人とともに仕事をしたり関わったりするだけでなく、自分自身も外国へ行き暮らすようになるかもしれない。国際理解はこれからますます不可欠なものとなるであろう。そのような中であってこそ、自分は何者であるかということがとても大事になってくるのではないだろうか。自分は日本人であるという日本人としてのアイデンティティをどの様にして培っていくのかである。それにはまず、自分の生まれ育った地域がどの様なところであるのかを知ることからだろうと思うのである。総合的な学習の地域学習の持つ意味は、これからの時代を生きていく子ども達にとってとても重要な意味を持っているのではないだろうか。

【謝 辞】

この論文を書くにあたりご協力をくださった小学校と有田市教育委員会に感謝申し上げます。

『総合的な学習の時間』の地域学習におけるアイデンティティ形成

- 1) 「中学校学習指導要領解説 総合的な学習の時間編 平成20年9月」P3
- 2) 文部科学省 HP より (https://www.mext.go.jp/a_menu/shotou/cs/1319944.htm)
- 3) 文部科学省 HP より (https://www.mext.go.jp/a_menu/shotou/cs/1320062.htm)
- 4) 文部科学省 HP より
(https://www.mext.go.jp/a_menu/shotou/new-cs/youryou/syo/sougou.htm)
- 5) 文部科学省 HP より
(https://www.mext.go.jp/a_menu/shotou/new-cs/youryou/chu/sougou.htm)
- 6) 和歌山県教育センター学びの丘 HP より
(www.manabo.wakayama-c.ed.jp/wakayama_hakken/pdf/section/00/002.pdf)
なお、「ふるさと教育副読本『わかやま発見』」は、和歌山県教育センター学びの丘 HP の「コンテンツ」「刊行物等」より閲覧することができます。
- 7) 「アイデンティティ」はエリック・H エリクソンが、その著書『幼児期と社会』の中で述べた概念で、「自我同一性」と訳されている。ここでは、アイデンティティと述べる。
- 8) 「中学校学習指導要領解説 総合的な学習の時間編 平成20年9月」P1
- 9) 「中学校学習指導要領解説 総合的な学習の時間編 平成20年9月」P10
- 10) 「中学校学習指導要領解説 総合的な学習の時間編 平成29年7月」P8
- 11) 「中学校学習指導要領解説 総合的な学習の時間編 平成29年7月」P12
- 12) エリック・H・エリクソン著、仁科弥生訳、『幼児期と社会1』、みすず書房、1977、P336
- 13) エリック・H・エリクソン著、仁科弥生訳、『幼児期と社会1』、みすず書房、1977、P338
- 14) 「有田市誌」は昭和49年に有田市より発行された地域の資料で、その内容は自然編、歴史編、産業編、行政編などと多岐に渡っている。
- 15) 「有田市誌」P676-678
- 16) 和歌山県教育センター学びの丘 HP より
(www.manabo.wakayama-c.ed.jp/wakayama_hakken/pdf/section/02/03/142.pdf)
- 17) 「有田市誌」P890
- 18) 筆者の生まれ育った箕島漁港は、現在、太刀魚の水揚げ量日本一となっている。
- 19) エリック・H・エリクソン著、仁科弥生訳、『幼児期と社会1』、みすず書房、1977、P336
- 20) 鎌幹八郎著、『アイデンティティの心理学』、講談社現代新書、1990、P61-62
- 21) エリック・H・エリクソン著、仁科弥生訳、『幼児期と社会1』、みすず書房、1977、P336-337
- 22) 鎌幹八郎著、『アイデンティティの心理学』、講談社現代新書、1990、P18-19
- 23) 鎌幹八郎著、『アイデンティティの心理学』、講談社現代新書、1990、P19-20